はじめに

コロナ禍でのボランティア活動を模索して

ボランティアセンター長　平野　方紹

2020 年の流行語大賞に輝いたのは、コロナ感染のリスクとされる「三密」（密閉・密集・密接）でした。また同年を表す漢字にも「密」が選ばれ、コロナ感染に人々がどれだけ振り回されているのか、改めて突きつけられました。

この「三密」対策は、人と人との接触（人流）を遮断・減少させることが基本ですので、人とのつながりや距離が従来通りにはいかないということとなりました。

こうして、感染予防のため 2020 年 2 月からキャンパスに人影はほとんど見られなくなり、卒業式、入学式、新入生歓迎イベントといった恒例行事もすべて中止になり、約 1 ヶ月遅れで始まった新年度の授業もほとんどがオンラインで、パソコンの画面越しで接するしかない状況が続きました。

こうした中、ボランティアセンターの活動も大きく影響を受け、「清里環境ボランティアキャンプ」や「農業体験 in 山形県高畠町」などのセンターの主要事業は中止となり、学生たちのボランティア活動支援も感染防止のため停止せざるをえない状況に追い込まれました。

市中に目を転じると、コロナで雇用不安や経済不安が一層深刻化し、支援を必要とする人々は増大し、特に子どもたちは家庭内に「閉じこもり」となり、心身に大きな影響が生じていることが各方面から指摘されています。

本来であれば、こうした事態に人々が手を取り合って支援する、まさにボランティアが、その真骨頂を発揮して活躍すべきところですが、「感染予防」のために、手を差し出すことができず、それを見ているしかない、という現実が突きつけられました。ボランティアセンターとしても、単に予定していた事業を実施できないだけでなく、社会的に必要とされながら、それに応えることができないというジレンマを抱え続けた日々でした。

これは学生たちも同じです。子どもたちやお年寄り、地域の皆さんの笑顔を「活動の糧」としてきた多くの学生たちにとって、いきなりつながりを「遮断」され、「部外者」にされてしまったことによる戸惑いは決して小さなものではありません。

コロナ感染が人々の健康や暮らしに暗い影を落としていることはいくら強調してもしきれません。そして、人々の心にも深刻なダメージを与えています。

感染者やその家族への誹謗中傷、医療従事者への偏見や攻撃など、本来病気をいたわったり、その努力に感謝すべきなのに真逆の行動が後を絶ちません。

この根底には、「感染させる他者」と「感染させられる自分」という対立構造が、人と人との関係にはびこってしまったと言えます。誰もが自分を守ることに汲々とし、この対立構図に飲み込まれ、絆や連帯といった人と人とのつながりが吹き飛ばされてしまいました。このトゲトゲしさが社会を覆っていることに事態の闇の深さがあります。

コロナ禍での「三密」対策は自分を守るためでもありますが、社会全体で感染を収束させようという「社会連帯」の取り組みでもあります。しかし、自己防衛に強迫され、みんなでコロナ禍を乗り越えようという意識は残念ながら希薄になっているではないでしょうか。

周りの人とつながっていることに思いをはせる、他者を思いやる想像力を働かせる、そんな「人を思いやる心」が、いまの殺伐とした社会に求められています。

これまでほとんど口にのぼらない言葉でありながら、この感染下で、頻繁に使われるものに「対面」があります。これまでの生活や大学での当たり前の日々はこの「対面」であったようです。

この対面は、「face to face」の訳語とされています。直に顔を会わせ、直接言葉を交わす、そんな形態的意味と、「心を通わせる」という含意もあると言います。対面での活動がなくなってしまったことで、心が通じにくくなったとすれば、今後ワクチン接種や治療法開発で感染禍を乗り越えたとしても、人々の心に荒涼とした枯れ野だけが広がっていたのでは明るい未来を築くことは難しいでしょう。

こうした困難な時期だからこそ、「人を思いやる心」を育み、広げることが大きな意味を持っています。

2020 年度のボランティアセンターの活動は大きな制約を受けましたが、スタッフ一同、この灯を絶やしてはいけない、できるかぎりのことをしようという想いで活動してきました。

オンラインでのボラカフェやサミットの開催、ボランティアセンターメールマガジンの改善、バリアフリー上映会のオンライン化など新たな取り組みも行いました。五里霧中の中、みんな手探りではありましたが、黙って下を向いてうずくまるのではなく、できることを摸索してきた日々でした。

その意味では、ボランティアセンターの存在意義が問われた 1 年でもありました。

まだ、その確固とした答えは出ていませんが、次につなぐ何かが、手応えが見えてきたと思います。混迷と混乱の 2020 年度でした。この 1 年を、無駄で無意味とせず、これからの活動の糧とできるよう、ボランティアセンターに関わる多くの方々のご指導ご鞭撻をお願いする次第です。